

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20012

研究課題名（和文）『説文解字篆韻譜』の総合的研究

研究課題名（英文）Research of Shuowenjiezi-zhuanyunpu

研究代表者

白石 将人（Shiraishi, Masato）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：60869816

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：『説文解字篆韻譜』は単独で書物として存在しているわけではなく、『説文解字』の簡略本として誕生したわけであるから、他の『説文』関連書籍のテキストとの関連の上で、テキストが存在していると考えられる。宋代、元代においては、必ずしも、『説文』の原文そのものが受け入れられていたわけではなく、現在から見れば、当時の人の主観によって改められたテキストが広く受容されていたことが明らかとなった。これは、『篆韻譜』という簡略本が、『説文』そのものよりも広く受け入れられていたことと軌を一にする状況であり、当時の学問傾向が、当時の需要に適合したテキストを作り上げ、それを流通させるものであったことを窺うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国古典のテキストは、過去から現在にいたるまでほぼ固定しているというのが、一般的な認識である。勿論、大体においてはその通りであるが、部分的な箇所においては時代によりテキストが変化しているのも事実である。特に、テキストの変化は、写本から印刷本へと書物の形態が変化した宋代に顕著に起こっている。本研究では、『説文解字』という書物を例として、宋代におけるテキストの変化の実相の一端を明らかにできた。このことは、中国文献学の研究においても、一般の中国古典テキストに対する見方についても参考価値を有する研究であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In Song dynasty, the formations of Chinese books changed, from manuscripts to printed books. The Shuowen-jiezi not only changed formation of book, but also changed its text.

研究分野：中国語学

キーワード：小学 説文 中国語学 中国学

### 1. 研究開始当初の背景

『説文解字篆韻譜』に関しては、日中両国の学会において基礎的な研究がまだ十分ではなく、根本的な問題がいまだ手つかずで残されていた。『説文解字篆韻譜』には十巻本と五巻本が存在しているが、十巻本に関しては、台北所蔵の写本の影印が流布しているが、その他の所蔵先の写本に関してはその実態がいまだつかめておらず、不明な点が多い。五巻本に関しても、最古の版本は影印されて流布しているが、その刊行の背景事情などについてはいまだ明らかでなく、その点も明らかにする必要がある。中国では『四庫全書』に収録するにあたり五巻本が底本として選択され、『四庫全書総目提要』において解説がなされている。しかし、清末までは十巻本が発見されていなかったため、当然ながら十巻本に関しては『四庫全書総目提要』は言及していない。清末に馮桂芬が十巻本を発見して、それを日本から渡来したものだとして判断した。その後、王国維が五巻本と十巻本の先後関係に対して見解を述べた。また、王国維は李舟の『切韻』という現在では失われてしまった書物が、『説文解字篆韻譜』に付されている音注の形成に影響を与えたであろうことを指摘した。日本では頼性勤『説文入門』という書物が『説文』学関連書籍の一環として取り上げられているが、未だ専著はない。王国維の見解に対しては小川環樹「説文篆韻譜と李舟切韻」(『ビブリア』75号、天理図書館報、1980年)が異論を述べ、工藤早恵の一連の研究である「説文解字篆韻譜伝本考」(『中国語学』234号、中国語学研究会、1987年)、「十巻本説文解字篆韻譜について」(『東京都立大学人文学報』、1990年)、「十巻本説文解字篆韻譜所拠の切韻系韻書について」(『中国文学研究』第17期、早稲田大学中国文学会、1991年)が小川の見解に対して、また別の見解を述べた。糸原敏章「張次立による説文解字繫伝の校訂について 十巻本説文解字篆韻譜を手掛かりに」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、2009年)が工藤の研究の上に立って小篆の字形の変遷に関して自説を述べたが、小篆の字体に関する研究であり、未だ全面的な研究は存在していない。また、近年、鈴木俊哉が精力的に研究を行っている。「説文解字篆韻譜と説文解字繫傳収字対応調査」(東洋学へのコンピュータ利用第29回セミナー 29-43-275 2018年)、「説文解字篆韻譜の重出・類形異字と王筠説文韻譜校」(東洋学へのコンピュータ利用第28回研究セミナー 367-449 2017年)、「説文解字篆韻譜に見える説文解字繫傳25巻所収文字の状況」(情処研報: 人文科学とコンピュータ (CH) 113(2) 1-8 2017年)等である。だが、やはりこれらの研究も小篆の字体の比較を主目的としたものであって、未だ書誌学的な見地からのテキストの性質の研究はなされていない。

### 2. 研究の目的

『説文解字篆韻譜』の五巻本と十巻本の先後関係に関して、合理的な説明を与えることを目的とした。王国維が五巻本と十巻本の先後関係に関して見解を述べたが、日本の小川環樹がこれに対して異論を唱えた。工藤、糸原は小川の研究に対してまた別の見解を述べている。この問題に関しては一定の結論が未だ得られていないため、研究してその先後関係を理解しようとした。十巻本の写本は、台北所蔵の写本の覆刻本(ここで述べる覆刻本とは必ずしも厳密な意味での覆刻とは限らない。模刻や影刻なども含む。広い意味での複製本を指す。)が広く流通しているが、他の所蔵機関にも写本が蔵されているので、それらをも調査して、十巻本のテキストの性質を理解する。

十巻本には巻頭に複数の蔵書印が押されているが、それらの来歴をたどって、馮桂芬が述べたように、本当に日本から来た書物であるのかどうかを確かめる。十巻本が中国に渡来した時期としては、現在考えられているところでは、明朝末期から清朝初期と考えられ、日本では江戸時代の初期頃と考えられる。このような時期に、日本人が中国人にたいして、本の価値が分かった上で、中国に逆輸入させる可能性があったのかを検討する。

五巻本と十巻本には反切(中国に古来より伝わる音を表示する方式。二世紀ごろに考案され、中国ではアルファベットによる表音法が普及するまで広範に用いられた。「A, B C 反(切)」のような形で用いられ、Bの声母と、Cの韻母を結合させて、Aの漢字音を表わす方法)が付されているが、同じ漢字で表音されている字も多いが、部分的に違った漢字が使われている。これは、五巻本と十巻本の依拠した韻書(漢字のある定められた発音の順序に従って配列した書物。)が異なるためと考えられ、それぞれの反切の特色を検討し、もともとなった韻書の性質を明らかにする。

### 3. 研究の方法

写本や刊本の写真版を集め、それを比較対照する。その際、細かな差異についてその由来を探究することはせず、全体的な傾向性に注意する。

台北所蔵の十巻本の写本の覆刻本に関しては、早稲田大学図書館のインターネットで書影が複数種類公開されているので、それをまず参照する。他の図書館に所蔵されている十巻本に関しては、その図書館がインターネット上で書影を公開しているのならそれを参照するが、インターネット上で公開されていないのなら、実際にその図書館に行って、書物のマイクロフィルムを見させてもらい、それを撮影するか、あるいは現物の閲覧許可を申請する。

十巻本に押されている蔵書印の来歴に関しては、さまざまな蔵書印を集めた蔵書印譜を複数調査して、同じものがないかを探す。蔵書印の数自体は大変多く、全てを網羅している蔵書印譜もないので、現在閲覧可能な蔵書印譜をできるだけ自分で収集するか、他の所蔵機関に閲覧に出かけて、できるかぎり自分で実見してみるしかない。また、蔵書印は本名が刻されていることは少なく、字（近代以前の中国人が持つ、本名以外のもう一つの名前。古代においては、本名で人を呼ぶことは大変失礼とされたので、成人した際には、本名の他に字（あざな）という他人に呼んでもらうときに使用する名前を自ら決めた。）あるいは号で刻されていることが多いため、明代、清代の人名と雅号を史料からできる限り収集した人名辞典である『明人室名別称字号索引』（楊廷福、楊同甫編、上海古籍出版社 2002 年）と『清人室名別称字号索引』（楊廷福、楊同甫編、上海古籍出版社 2001 年）などを調べて、時代的に不自然のない人名をピックアップし、その人物の来歴を調べ、十巻本の写本の所有者と考えてよいかを個別的に調査する。

五巻本と十巻本の反切の違いに関しては、文字そのものの違いは大きな意味を持たない。同じ声母または韻母の漢字であれば、それらが取り替えられていたとしても、音韻的には違いがないからである。事実、古代の中国人は写本を筆写する際に、同じ音韻の文字であれば、かなり自由に漢字を交換していたことが知られている。よって、漢字の違いにはさほどの意味はないため、文字の異なる反切の音韻的な位置を調べて、その差異を研究する。

#### 4. 研究成果

所期の目的はほぼ達成したが、いまだ十巻本と五巻本の先後関係の問題には最終的な回答を与えるにいたっておらず、今後のさらなる研究が必要である。十巻本と五巻本は調査したところ、内容が想定していた以上に似ていることが分かった。親字の小篆の字体に関してはすでに糸原がその差異に注目して研究している。糸原は研究目的のため、十巻本所掲の小篆と五巻本所掲の小篆の違いに注目して研究を進めているが、全体を通してみれば、両者の掲出している小篆の字体には共通点が多いと見なすことが可能である。また、『説文解字篆韻譜』の各親字には『説文解字』の説解を二文字くらいに簡略化した字解が付されている。十巻本と五巻本の間にはもちろん、差異が見られる。しかしながら、全体としてみれば、やはり共通した字解が付されている箇所が多いのであって、十巻本と五巻本はかなり趣を異にしているとは言え、やはり同じ書物の改編本であることが分かる。しかしながら、やはり十巻本と五巻本ではエディションが異なるのであるから、その違いは無視していいものではなく、意味があるはずである。その意味を今後考察していきたい。今次の研究は、十巻本と五巻本の間の差は小さいが、それが有意義な差異であることを確認できたという意義があった。

覆刻本やインターネット上で公開されている書影だけでは、研究に限界があるので、実際に国外の図書館に行って書籍を閲覧するつもりであったが、コロナの影響で国外に行くのが困難であったため、実行できなかった。初年度より最終年度の方がコロナの影響が弱まり、国外に行ける可能性が高くなると想定して、予算の配分を途中で変更してまでして、最終年度に国外に行く可能性を探っていたが、結局、無理であった。この点は、遺憾とするところである。

十巻本に押されている蔵書印の調査はかなり進んだ。明代末期から清代初期にかけての中国南方に居住していた蔵書家の蔵書印が多く見られることが分かった。しかしながら、全ての蔵書印の来歴が解明できたわけではない。目下の所目睹し得た蔵書印譜は限定的であるので、今後も蔵書印譜の類を収集して、全ての蔵書印の来歴を解明し、そのことを通じて十巻本が歴史的に經由してきた道を明らかにしていきたい。

また、十巻本と五巻本に付されている反切については、その違いに注目することも重要であるが、実際に調査してみると、文字の違いの上から言っても異なっている箇所は少ないし、音韻の上から言ってみても、実質的な差異のある例はさらに少ない。やはり全体的に比較してみると差異は必ずしも大きいとは言えない。この違いは、十巻本と五巻本の編者の音韻体系の違いを反映しているのではなく、依拠した韻書の音韻体系が異なっていたことの反映であると考えられる。十巻本と五巻本に付されている反切が相互に似通っているということは、両者が依拠した韻書の音韻体系がそもそも似ていたものであったことを強く示唆する。よって、十巻本と五巻本の依拠したそれぞれの韻書は、韻書の系統として同じ系統に属していたと考えられる。このことは、中国の韻書研究の歴史を研究する際にも有効な知見と考えられる。

#### 引用文献

- 小川環樹「説文篆韻譜と李舟切韻」(『ビブリア』75号、天理図書館報、1980年)
- 工藤早恵「説文解字篆韻譜伝本考」(『中国語学』234号、中国語学研究会、1987年)
- 工藤早恵「十巻本説文解字篆韻譜について」(『東京都立大学人文学報』、1990年)
- 工藤早恵「十巻本説文解字篆韻譜所拠の切韻系韻書について」(『中国文学研究』第17期、早稲田大学中国文学会、1991年)
- 糸原敏章「張次立による説文解字繫伝の校訂について 十巻本説文解字篆韻譜を手掛かりに」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、2009年)
- 鈴木俊哉「説文解字篆韻譜と説文解字繫傳収字対応調査」(東洋学へのコンピュータ利用第29回セミナー 29 43-275 2018年)
- 鈴木俊哉「説文解字篆韻譜の重出・類形異字と王筠説文韻譜校」(東洋学へのコンピュータ利

用第 28 回研究セミナー 367-449 2017 年)

鈴木俊哉「説文解字篆韻譜に見える説文解字繫傳 25 卷所収文字の状況」(情処研報: 人文科学  
とコンピュータ (CH) 113(2) 1-8 2017 年)

楊廷福, 楊同甫編『明人室名別称字号索引』(上海古籍出版社 2002 年)

楊廷福, 楊同甫編『清人室名別称字号索引』(上海古籍出版社 2001 年)

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1．発表者名 白石将人
2．発表標題 關於張次立の小徐本校訂（張次立の小徐本校訂について）
3．学会等名 第三回早期中国經典研究學術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 白石将人	4．発行年 2021年
2．出版社 中華書局	5．総ページ数 228
3．書名 説文文本演变考－以宋代校訂為中心－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------